

宋代の水仙花——詩詞に見る黃庭堅の影響について——

中尾 彌 繼

はじめに

宋詩において、それ以前には注目されてこなかった題材に着目し詩を詠じる傾向は多くの研究者が同意する所であろうし、筆者もこれまでに蠟梅や酴醾といった植物を題にして詩を詠む、いわゆる詠花詩を例にとり、北宋の黃庭堅とその周辺の詩人たちにより一時の流行が興り、以降詠花詩としての題材の地位を確立した、という宋代詠花詩の一面を論じてきた⁽¹⁾。宋詩における詠花詩については、まだ取り上げるべき事象が多いが、今回は水仙花について言及してみたい。

一

黃庭堅には水仙の花を詠じた詩が六首あり、いずれも建中靖國元年（一一〇一）荊州における作である⁽²⁾。そのうちまず二首連作のものを挙げてみる。

次韻中玉水仙花二首（中玉の水仙花に次韻す 二首）

其一

借水開花自一奇
水沉爲骨玉爲肌
暗香已壓酴醾倒
只比寒梅無好枝

水を借りて花を開きて自ら一奇
水沉は骨と爲し 玉は肌と爲す
暗香 已に酴醾を壓して倒し
只だ寒梅に比すれば好枝無し

其二

淤泥解作白蓮藕
糞壤能開黃玉花
可惜國香天不管
隨緣流落小民家

淤泥 解く白蓮の藕を作し
糞壤 能く黃玉の花を開く
惜しむ可し 國香 天も管せず
緣に隨りて小民の家に流落するを

中玉とは馬城（？・一一〇一）⁽³⁾の字で、當時荆湖北路轉運副使の任にあり、黃庭堅との唱和も多かったというが、『全宋詩』には一首見えるのみで、黃庭堅が次韻した元の詩も今は傳わっていない。

一首目は前半二句でまず水仙の花の咲く様子を詠う。後半の二句のうち、三句目で酴醾

を壓倒するほど香りであるというのは、「暗香」の語もあることから、北宋の林逋が「山園小梅」で梅を形容した「疏影横斜水清淺、暗香浮動月黃昏」を連想させる。四句目で梅のように良い枝が無いと言うのは、任淵が「水仙叢生、故云『無好枝』」と注しているものの、いささか理解しにくい。あるいは三句目の「暗香」に對して、固い枝振りではなく水仙の弱々しい葉や莖に「疏影」をイメージさせるのかもしれない。

しかし二首目になると趣が異なる。前半の二句は白く美しい蓮が污泥から咲き、水仙が汚い土から黄玉のような花を咲かせることが出来るのと言うが、後半の二句は、國で最もよい香りが天も知らぬ間に貧しい家に落ちぶれることを惜しむと述べており、一見するとなぜ水仙をこのように表現したのか、いささか判斷に窮する所がある。この二句については、任淵が高荷の記した「國香詩序」を引いて注している。少し長いがこの序文を引いてみる。

此詩蓋山谷借以寓意也。按高子勉所作「國香詩序」云、「國香、荆渚田氏侍兒名也。黃太史自南溪召爲吏部副郎、留荊州、乞守當塗待報、所居即此女子隣也。太史偶見之、以謂幽閑姝美、目所未睹。後其家以嫁下俚貧民、因賦此詩以寓意、俾予和之。後數年、太史卒於嶺表。當時賓客雲散。此女既生二子矣、會荆南歲荒、其夫鬻之田氏家。田氏一日邀予置酒、出之、掩抑困悴、無復故態。坐間話當時事、相與感歎。予請田氏名曰「國香」、以成太史之志。政和三年春、京師會表弟汝陰王性之、問太史詩中本意、因道其詳、乃爲賦之」

（此の詩 蓋し山谷借りて以て意を寓するなり。按ずるに高子勉の作る所の「國香詩序」に云う、「國香、荊渚の田氏の侍兒の名なり。黃太史 南溪自り召されて吏部副郎と爲る、荊州に留まり、當塗に守たらんと乞いて報を待つ、居する所即ち此の女子の隣りなり。太史偶之を見、以て幽閑姝美、目の未だ睹ざる所なりと謂う。後に其の家以て下俚の貧民に嫁がしむ、因りて此の詩を賦して以て意を寓し、予を俾て之に和さしむ。後數年にして、太史嶺表に卒す。當時の賓客雲散す。此の女既に二子を生むも、荊南歲荒に會い、其の夫之を田氏の家に鬻ぐ。田氏 一日予を邀えて酒を置き、之を出だす、掩抑困悴し、復た故態無し。坐間に當時の事を話し、相與に感歎す。予田氏に請いて名づけて「國香」と曰いて、以て太史の志を成す。政和三年春、京師にて表弟の汝陰の王性之に會い、太史の詩中の本意を問わる、因りて其の詳かなるを道いて、乃ち爲に之を賦す」と。

『黃庭堅年譜新編』⁽⁴⁾によれば、建中靖國元年（一一〇一）に高荷は黃庭堅と會つており、黃庭堅が詠じたその年にこの詩のことも知り、また唱和したことになる。

序文の大意はこうである。黃庭堅が荊州にいた時、隣家の大變麗しい娘と見知るも、後に卑しい貧家に嫁ぐこととなり、このことを詩に託して詠じた。數年後に黃庭堅は亡くなり、娘は二人の子に恵まれるも、凶作のために夫によつて田氏に賣られることになつてしまう。ある日高荷は田氏に招かれ、今は侍女となつたあの娘と顔を合わせたが、その姿は昔の面影もないほど疲れ果てており、當時の經緯を聞いて共に悲しみ、そこで高荷は黃庭堅の想いを遂げるために、その侍女に「國香」と名付けた。それから更に後の政

和三年（一一一三）には表弟の王銍（性之は字）と都で會い、黃庭堅の詩の眞意を尋ねられたので、高荷は事の詳細を伝え、そして「國香詩」を詠じたという。

高荷の「國香詩」は非常に長く、内容も序文に言う故事をそのまま述べたものである。ここでは引かないが⁽⁵⁾、黃庭堅と隣家の娘を詩に和した建中靖國元年から、十二年後の政和三年、王銍の問いに應えて語り聞かせたこのことが、高荷に「國香詩」とその序文を書かせ、結果として黃庭堅の詩に言う「國香」の持つ眞意が、後世にも伝えられることとなったのである。

ここで詩語としての「國香」について、もう少し言及しておきたい。「國香」とは本來、『春秋左氏傳』宣公三年に「以蘭有國香、人服媚之如是」とあるように、蘭の花を形容する語である。黃庭堅がそれを知らないはずはないだろうが、その上で水仙の花の形容にあえて用いている。その奇をてらう表現は王銍が高荷に尋ねた例もあるように、讀者にいささか奇異なものを感じさせていたのであろう。

とはいえ「國香」を蘭以外の花の形容に用いたのは、何も黃庭堅が初めてではない。管見の限りでは唐代までにその例は見えないが、宋代に入つて蘇軾が梅の花を形容したのがおそらく最初であろう。

再和楊公濟梅花十絶（再び楊公濟の梅花十絶に和す）其二⁽⁶⁾

天教桃李作輿臺

天は桃李をして輿臺と作らしめ

故遣寒梅第一開

故に寒梅をして第一に開かしむ

憑仗幽人收艾蒨

幽人に憑仗して艾蒨を收め

國香和雨入青苔

國香 雨もろとも和もろともに青苔に入る

元祐六年（一〇九一）、杭州在任中の作である⁽⁷⁾。蘇軾が梅の花を好み、特に元豐三年（一〇八〇）の黃州左遷以後、梅花に政界復歸を願い返魂の情を込めるほどであったのは、岩城秀夫氏がすでに述べる通りであるが⁽⁸⁾、梅の香りを「國香」と形容するほど蘇軾が高く評價していたことが右の詩からも分かる。梅は蘇軾にとって特別な意味を持つ花であったが、これ以後も梅を「國香」と形容する例がしばしば見えるようになる。すべてではないが以下にいくつか例を挙げてみる。

風格孤高又國香

風格は孤高 又た國香

故教小雪發新妝

故に小雪をして新妝を發せしむ

（張耒「臘初小雪後圃梅開二首」之一）

國香無意欺蘭蕙

國香 蘭蕙を欺く意無し

天質應羞擬絮鹽

天質 應に絮鹽に擬すを羞ずべし

（周紫芝「次韻道卿梅花長句」）

花品無庸定等差

花品 等差を定むを庸する無し

國香國色屬吾家

國香 國色 吾家に屬す

(樓鑰「謝潘端叔惠紅梅有序」其十三)

國香萬斛量不盡
雪嶺諸峰互相映

國香萬斛量りて盡さず
雪嶺諸峰互いに相い映ず

(楊萬里「多稼亭前兩株梅盛開」)

蘇軾が「國香」を蘭以外の梅花の形容に用いたことで、後の詩人にもその影響が及んだのであろう。更に言えば、蘭以外の花を「國香」と形容するのは梅花にとどまらず、以下のような例も挙げることができる。

● 菊を形容する例

三鰲何必分靈樹
九畹那能擅國香

三鰲何ぞ必ずしも靈樹を分かたん
九畹那ぞ能く國香を擅にせん

(程俱「晚雨菊」)

國香何恨成淪落
秋月春風不解愁

國香何ぞ恨まん淪落を成して
秋月春風愁いを解かざるを

(許及之「過常山村店中見菊」)

●芍薬を形容する例

國香淪落在天涯
常畏人知使護遮

國香淪落して天涯に在り
常に畏る人の護遮せしむを知るを

（李洪「次韻子都兄鮑庵芍薬」其二）

素粧芍薬萬花王
葉未全舒滿國香

素粧の芍薬萬花の王
葉は未だ全て國を滿たす香りを舒ばさず

（徐鹿卿「月香亭主人送似牡丹座客作芍薬品題」）

●牡丹を形容する例

天工不管國香奇
流落民家識者希
特地邀賓賓不至
國香也是少人知

天工國香の奇なるを管せず
流落の民家識りし者は希なり
特地に賓を邀えるも賓至らず
國香も也た是れ人の知ること少なし

（袁甫「趣諸友觀牡丹」）

●蠟梅を形容する例

天向梅梢別出奇 天梅梢に向いて別に奇を出だし
國香未許世人知 國香未だ世人の知るを許さず

(楊萬里「蠟梅」)

楊萬里には他にも「和仲良分送柚花沉香」三首の其一で、

只得掾曹作南董 只だ得たり掾曹の南董を作すを
國香未向俗人誇 國香未だ俗人に向いて誇らず

とも言っており、南董とは春秋時代、齊の史官である「南史」と晉の史官である「董狐」とを合わせた呼稱で、後には優秀で史實に忠實な歴史官のことを指す語である。これは暗に高荷が黃庭堅が見初めた娘にまつわる出来事を忠實に「國香詩序」に記した事を指し、それを楊萬里は評價したのであろう。この詩でいう「國香」が柚花か沉香か、いずれを形容するのかは判然としないものの、これも蘭以外の花や香りを「國香」の語で形容した例である。元來「國香」が形容する対象は蘭であつたが、宋代に入り、蘇軾以降それが形容する対象は、梅を初め他の花にも範圍を廣げている。いずれの花を「國香」と形容するかは、おそらくその詩人の主観によるのであろうが、いずれにせよこれらは「國香」が從來持っていたイメージを擴張する現象だつたと言えよう。

もう一つ無視できないのは、梅以外の花を形容する例の中で、たとえば許及之が「國香何恨成淪落」と言うのは、黃庭堅の「可惜國香天不管、隨緣流落小民家」を連想させる

表現であるし、李洪「國香淪落在天涯、常畏人知使護遮」は「國香」が天涯に落ちて人に知られないよう隠れて咲いているというのは、高荷の「國香詩序」が言う、黃庭堅が荊州在留時に見初めた隣家の美しい娘が、貧しい家に嫁いで世人の知りえぬ所に身を置いてしまったことを踏まえているに違いなく、袁甫の例などはその最たるものである。これらは、單に「國香」を蘭や梅以外の花を形容するのみならず、「國香」の語と黃庭堅の詩にまつわる故事が強く結びついており、黃庭堅が水仙花を「國香」と形容したことに倣い、自らが認める香りよい花を形容するに、詩人たちは黃庭堅の典故を踏まえたのである。「國香」がこれまで蘭の花を形容する詩語として認識されていたのを、蘇軾が新たな形容のイメージを加えたことをきっかけにして、黃庭堅がさらにそのにイメージを広げる役割を擔ったと言えよう。

ただし、黃庭堅の水仙花における「國香」がここまで後世の詩人たちに影響を与えたのは、必ずしも黃庭堅一人の功績とは言えない。思うに黃庭堅の「次韻中玉水仙花二首」がそれだけで伝えられていたとすれば、單に蘇軾が「國香」を梅花の形容として用いたのち、詩人たちが菊や芍薬などそれぞれが好む花を「國香」と形容する例と同列のものとして存在するだけであつただろうし、ただ「可惜國香天不管、隨緣流落小民家」の句を見るだけでは、その表現の意圖を理解するのは困難であつたろう。この句が後世の詩人たちにも理解され影響を与えている要因は、黃庭堅以上に高荷の功績に因るところが相當に大きいはずである。高荷が建中靖國元年に黃庭堅の水仙花の詩を知つてのち、「國香詩序」を記し留めておいてくれたからこそ、後世の人々は黃庭堅の水仙花詩の意味を理解できるのであつて、そうでなければ黃庭堅の水仙花詩も、蘇軾のイメージ擴張にあ

やかった事例の一つとしか見なされなかったかもしれない。黄庭堅の水仙花詩が後世に影響を与えたのは、高荷の功績があればこそである。

もちろん水仙花を詠む詩に「國香」を用いる後世の例もあり、張孝祥（1132-1169）の作品にそれが見える。

水仙

淨色只應撩處士 淨色 只だ應に處士を撩い

國香今不落民家 國香 今は民家に落ちず

江城望斷春消息 江城 望斷す春の消息

故遣詩人詠此花 故に詩人を遣て此の花を詠ましむ

任淵注が高荷「國香詩序」を引く際、その注の最後に「此詩和者甚衆、故併錄之」と述べている。張孝祥の詩はその一例である。

二

黄庭堅の水仙花詩では、「次韻中玉水仙花二首」の他にも特徴的なものがある。

王充道送水仙花五十枝、欣然會心、爲之作詠

（王充道 水仙花五十枝を送らる 欣然として心に會う 之が爲に詠を作す）

凌波仙子生塵襪

凌波の仙子 塵を生ずる襪

水上輕盈步微月

水上 輕盈として微月に歩む

是誰招此斷腸魂

是れ誰か此の斷腸の魂を招き

種作寒花寄愁絕

種えて寒花と作して愁絶を寄す

含香體素欲傾城

香を含み 體は素にして 城を傾けんと欲し

山礬是弟梅是兄

山礬は是れ弟 梅は是れ兄

坐對眞成被花惱

坐して對すれば眞成に花に惱まさる

出門一笑大江橫

門を出でて一笑すれば 大江横たわる

一句目にいう「凌波仙子」は、曹植の「洛神賦」の「凌波微步、羅襪生塵」にいう、洛水の女神が波を乗り越え靜かに歩き、薄絹のくつから塵が起こる様子になぞらえ、水仙花と女神のイメージを重ねている。後世「凌波仙子」が水仙花の別名になったのは、この句に基づいている。

後半の四句はより花に近づいた描寫となる、芳しい香りを放つ白い花は國を傾ける程本當に惱ましいものであり、水仙の花の香りに酔った自身のことを、表に出て自嘲しつつ廣く横たわる長江を眺めやるといふ、黃庭堅らしいユーモアに溢れ、いかに魅力的な花であるかを詠む。ここで注目したいのは、「山礬是弟梅是兄」の句である。「山礬」とは

和名ではハイノキ^⑨のことであり、水仙よりも少し遅い時期に咲く花である。そもそも山礬については、黄庭堅の「戲詠高節亭邊山礬花二首」の序に、

江湖南野中、有一種小白花、木高數尺、春開極香、野人號爲鄭花。王荊公嘗欲求此花栽。欲作詩、而陋其名。予請名曰山礬。野人采鄭花葉以染黃、不借礬而成色、故名山礬。

（江湖南野の中、一種の小白花有り、木高數尺、春に開きて極めて香り、野人號して鄭花と爲す。王荊公嘗て此の花を求めて栽えんと欲す。詩を作らんと欲すも、而るに其の名を陋しとす。予名を請うて山礬と曰う。野人鄭花の葉を採りて以て黄を染め、礬を借りずして色を成す、故に山礬と名づく。）

とあり、南方の野に咲く小さな白い花で、春によく香り、土地の者は葉を取って黄色の染料に用いていたそうだが、王安石がこの花のことを「鄭花」と呼ばれるのを嫌ったので、黄庭堅が山礬と名付けたという。「山礬」という語自體、黄庭堅が名付けただけあってそれ以前の用例を見ないが、黄庭堅にとっては自ら名付けた花でもあり、山礬への思い入れもあったであろう。その名を黄庭堅は「山礬是弟梅是兄」の句で用い、水仙花よりも早く咲く梅の花を姊、遅く咲く山礬を妹に見立てて、梅・水仙・山礬が三姊妹であるのだという、實にユニークな見解を示したのである。

しかしこの黄庭堅の見解は、後世の詩人たちにすぐさま評價され受け入れられたわけで

はない。たとえば周紫芝（1082 - ?）は「九江初識水仙二首」の其一で次のように詠んでいる。

七十詩翁鬢已華	七十の詩翁鬢已に華たり
平生未識水仙花	平生未だ水仙の花を識らず
如今始信黃香錯	如今始めて信ず黃の香りに錯りて
剛道山礬是一家	剛に山礬 ^{まさ} 是れ一家と道うを

周紫芝は晩年に九江に隱居し、その地で生涯で初めて水仙の花を見知ったのだが、後半の二句「如今始信黃香錯、剛道山礬是一家」は、先に挙げた黃庭堅の「坐對眞成被花惱、出門一笑大江橫」を意識しており、かつて黃庭堅が、水仙の花の香りの錯覺によつて山礬が（水仙の）家族であると言つたのだと思つていたのを、今ようやくそれが本當の事だつたのだと信じたと綴つてゐる。これは言い換えれば、周紫芝はもともと山礬の花のことはその香りも含めて知つており、黃庭堅が惱まされたという水仙の香りが果たして肩を並べるほどであるのか、これまで疑つていたのであろう。九江で水仙と出會ひ、その香りが山礬に劣らぬものであることを知り、ようやく疑いの氣持ちは晴れたのである。あるいは南宋の曾極は「游寒巖二首」の其一¹⁰で、さらに以下のように私見を述べる。

金玉其相一兩花	金玉其の一兩花
遐心空爲爾興嗟	遐心空しく爾が爲に嗟きを興す

山礬不用來修敬 山礬 來たりて修敬するを用いず
只許江梅共一家 只だ許す江梅 共に一家たるを

こちらはより明瞭かつ辛辣で、江邊の梅は黃庭堅が「梅兄」と述べたように水仙と姉妹であつてもよいが、山礬については敬意を表す必要は無いとまで斷じている。ここではそこまで述べる理由にはわからに想像し得ないが、黃庭堅が山礬を「礬弟」と水仙の妹であると述べたことに對して、否定的であつたのは間違いない。

楊萬里の詩にも、曾極ほど否定的な意見ではないものの、「三花斛」三首のうち水仙を詠じる一首に、

銀臺金盞談何俗 銀臺金盞 談ずるに何ぞ俗なる
礬弟梅兄品未公 礬弟梅兄 品未だ公ならず

と言つており、水仙を俗なものとした上で、山礬と梅を姉妹とする黃庭堅の見解は、楊萬里としては公平な等級の付け方ではない、と考へていたようである。

なお補足的ではあるが、黃庭堅の水仙花の詩に影響を受けているという點から言えば、楊萬里には次のような詩も見える。

千葉水仙花

千葉の水仙花

薤葉葱根兩不差	薤葉葱根兩つながら差あらず
重蕤風味獨清嘉	重蕤の風味獨り清嘉たり
薄揉肪玉圍金鈿	薄く肪玉を揉みて金鈿を圍い
淺染鵝黃剩素紗	淺く鵝黃に染め素紗を剩す
臺盞元非千葉種	臺盞元は千葉の種に非ず
丰容要是小蓮花	丰容要是是れ小蓮花
向來山谷相看日	向來山谷相看るの日
知是他家是當家	知る是れ他家は是れ當家なるを

この詩には序文があり、詠じるにあたり次のように述べている。

世以水仙爲金盞銀臺。蓋單葉者、其中眞有一酒盞、深黃而金色。至千葉水仙、其中花片捲皺密蹙、一片之中、下輕黃而上淡白、如染一截者、與酒盃之狀殊不相似、安得以舊日俗名辱之。要之、單葉者當命以舊名、而千葉者乃眞水仙云。

（世に水仙を以て金盞銀臺と爲す。蓋し單葉の者、其の中に眞に一酒盞有り、深黃にして金色なり。千葉の水仙に至りては、其の中の花片、捲皺密蹙たり、一片の中に、下は輕黃にして上は淡白、一截を染めるが如き者は、酒盃の狀と殊に相似ず、安んぞ舊日の俗名を以て之を辱むるを得んや。之を要するに、單葉の者は當に命ずるに舊名を以てすべく、而るに千葉の者は乃ち眞に水仙たりと云う。）

楊萬里にとつての水仙花は、單瓣のものと多瓣のものがあるが、世間で呼稱している「金盞銀臺」は單瓣のものの名であつて、本當に「水仙」と呼稱できるのは多瓣のもののみで、それこそが眞の水仙花である、という持論を展開しており、そのこだわりは詩の方でも顯著に現れている。前半の四句は多瓣の水仙の姿を細やかに描寫し、五・六句で序文に述べるこだわりを述べる。最後の二句は黃庭堅を引き合いに出し、黃庭堅が水仙と出會つた當時にも、單瓣が他家で多瓣が本家であると分かつていたとくくつてゐる。黃庭堅の詩には、當時の水仙花が單瓣であつたか多瓣であつたか、それを示す描寫は無論見えない。楊萬里はそれを承知で彼なりのユーモアで水仙を評したことになるが、そこに黃庭堅を持ち出す所にその影響が大きいことをうかがい知れよう。

三

黃庭堅が水仙花を詩に詠じたことで、後の宋人にいかに影響を受けていたのか、詩における状況を眺めてみたが、詞においてはどうかであつたのだろうか。

「國香」を典故として用いる例は、たとえば王沂孫（1230? - 1290?）の「慶宮春（水仙花）」などに見える。ここではその後関を引く⁽¹¹⁾。

國香到此誰憐

國香 此に到りて誰か憐まん

煙冷沙昏

頓成愁絕

花惱難禁

酒銷欲盡

門外冰漸初結

試招仙魄

怕今夜 瑤簪凍折

攜盤獨出

空想咸陽

故宮落月

煙は冷たく 沙は昏く

頓かに愁絶を成す

花は悩み禁じ難く

酒は銷え盡きんと欲し

門外の氷漸 初めて結ぶ

試みに仙魄を招けば

怕る 今夜 瑤簪は凍りて折れん

盤を攜え獨り出で

空しく想う 咸陽

故宮の落月を

冒頭に用いられる「國香」はやはり黃庭堅の詩に言う、貧家に嫁いで薄幸の暮らしを送った娘を連想させ、そのイメージを水仙の花に込めている。以降の句も、愁い色あせ今にも生氣を失わんとするような描寫で水仙を描き、最後の句は金杯銀臺の水仙の花を、昔咸陽の宮殿にいたであろう宮女に見立てて、その咲く姿を詠む。詩における「國香」は、どちらかというと望まぬ地に咲き落ちて人知れず咲き誇る、という方向で描かれているが、王沂孫の詞に描かれる水仙花は、さらに「國香」の心情に踏み込んで、過去の良き日を懷かしむという部分までを描いている。

詩では賛否の分かれていた山礬の方はどうだろうか？北宋から南宋にかけての詞人・趙長卿の「惜奴嬌（賦水仙花）」の後関に、目を引く描寫がある。

簪蔔粗疏

怎似妖嬈體調

比山樊也應錯道

最是殷勤

捧出金盞銀臺笑

拚了

仙源與奇葩醉倒

簪蔔は粗疏にして

怎でか妖嬈たる體調に似ん

山樊に比ぶるも也た應に錯りて道うべし

最も是れ殷勤たるは

金盞銀臺を捧げ出だして笑う

拚了す

仙源にて奇葩と酔い倒れんを

二句目に言う「比山樊、也應錯道」は、いかにも黄庭堅が水仙の花の香りに酔って山簪を水仙と並べたことを典故とし、趙長卿はそれに對して間違つて言つた事だつたのだろ
うと言ひ、ここでも黄庭堅のいう水仙と山簪を三姊妹とする見解に異論が加えられた形
となつてゐる。黄庭堅にしてみれば山簪は自ら名付けた花の名であり、それなりの思ひ
入れがあつて用いてゐるのであるが、他の者にしてみれば必ずしもそうではなく、先
に取り上げた周紫芝の「九江初識水仙二首」の其一のように、水仙と山簪を一家の姊妹
と見なす見解に最初から共感を示したわけではなく、黄庭堅の見解と温度差が感じられ
るのも、やむを得ない所であらう。同じ黄庭堅の詩から詠じられた水仙花詩でも、「國香」
の典故と「山簪」の見解とでは、後世の評価も受容の過程もそれぞれ異なるようである。
しかし南宋中頃の林正大あたりになると、また少し違つた視點で山簪が取り上げられる
ことになる。

山谷水仙花：凌波仙子生塵襪、水上輕盈步微月。是誰招此斷腸魂、種作寒花寄愁絕。
含香體素欲傾城、山礬是弟梅是兄。坐對眞成被花惱、出門一笑大江橫。括朝中措

凌波仙子襪生塵

凌波仙子 襪は塵を生ず

水上步輕盈

水上 歩は輕盈たり

種作寒花愁絕

種えて寒花の愁絶たるを作さば

斷腸誰與招魂

斷腸し 誰か與に魂を招かん

天教付與

天付與せしむ

含香體素

香を含み 體は素にして

傾國傾城

國を傾け城を傾けんを

寂寞歲寒爲伴

寂寞たる歲寒 伴と爲すは

藉他礬弟梅兄

他の礬弟梅兄を藉りん

「朝中措」の詞牌を用いて、序文の内容を隱括した詞である。序文には黃庭堅の「王充道送水仙花五十枝」詩が擧げられており、例の「山礬是弟梅是兄」を踏まえている。前関では、水仙を波の上を渡る仙女に見立てて、哀愁を誘う水仙の美しさを詠じ、後関でも香りや容姿が國を傾けるほどだと花を褒める。注目すべきは後関の最後の句にいう「寂寞歲寒爲伴、藉他礬弟梅兄」である。寂しい冬にかの山礬や梅を借りて連れ合いと

したい、と言っており、ここではこれまでの例と異なり、水仙と梅、山礬を分け隔てることなく同列に扱う。もちろん作品の意圖から言えば、黃庭堅の詩意から外れた詠じ方をするのではないだろうが、それでも詞において山礬が受容された例として特筆すべきである。同様の事は、南宋の楊澤民の「浣溪沙（水仙）」にも言える。

仙子何年下太空

仙子何れの年にか太空を下り

凌波微步笑芙蓉

凌波の微步 芙蓉を笑う

水風殘月助惺忪

水風 殘月 惺忪を助く

攀弟梅兄都在眼

攀弟 梅兄 都て眼に在り

銀臺金瑣正當胸

銀臺金瑣 正に胸に當たる

爲伊一醉酒顏紅

伊が爲に一たび酔えば酒顏紅し

前関ではやはり水仙の花を仙女に見立ててその美しさを述べ、後関では山礬と梅が目の前にあり、胸元に掲げるさかずきを水仙の花に見立てて三姊妹を並べ、意中の人を想つて酒に酔うのを描いている。ここでも、これまでに見てきたような山礬への否定的な態度は見られず、梅・水仙・山礬を一家とすることが受容されている。

さらに周密（1232-1298）の詞においては、ようやく「國香」と「山礬」が、明確に作品の中で融合を果たすことになる。

宋代の水仙花

夷則商國香慢（賦子固凌波圖）

玉潤金明

記曲屏小几

翦葉移根

經年汜人重見

瘦影娉婷

雨帶風襟零亂

步雲冷 鵝筦吹春

相逢舊京洛

素靨塵縑

仙掌霜凝

國香流落恨

正冰銷翠薄

誰念遺簪

水天空遠

應念攀弟梅兄

渺渺魚波望極

五十絃 愁滿湘雲

玉潤金明

記す 曲屏の小几に

葉を翦り根を移せるを

年を経て 汜人 重ねて見えれば

瘦影は娉婷たり

雨帶と風襟は零亂として

雲の冷たきを歩き 鵝筦は春を吹く

舊き京洛に相い逢いて

素靨 塵に縑れ

仙掌 霜凝れり

國香流落の恨み

正に冰銷えて翠薄まる

誰か遺簪を念わんや

水天 空しく遠く

應に攀弟梅兄を念うべし

渺渺たる魚波に望め極まり

五十絃 愁い 湘雲に滿つ

淒涼耿無語

夢入東風

雪盡江清

淒涼耿として語る無く

夢に東風入りて

雪盡き江清らかならん

題に言う「子固」とは、南宋の著名な畫家・趙孟堅（1200?）の字である。彼が描いた水仙花圖に周密が題したという詞で、その後関に描かれるのは、かの黃庭堅が見初めた娘を連想させ、「國香」たる水仙が望まぬ形で落ちぶれて誰にも見向きもされず、そのような時に思い描くのは、はるか遠くにいる山礬と梅の兩姊妹である。黃庭堅が水仙花の詩で別個に詠じた「國香」と「山礬」、美しい容姿を備えながらも貧しい家に嫁いだゆえに落ちぶれてしまう娘に、姉と妹がいるという設定を盛り込むことで、この兩者が一つの作品の中に共存し得る環境を、周密は整えたのである。

もちろんこれまでにおいて、「礬弟梅兄」が水仙の姊妹であるというのは、この三者を擬人化した表現として当たり前に用いられているように見えるが、周密までの例は三者はあくまで植物として捉えられている感が強く、曾極や趙長卿が山礬を水仙と肩を並べるのに否定的であった理由も、やはり植物として山礬を見ていたゆえであったはずである。林正大や楊澤民らの詞においてすでに「礬弟梅兄」を否定的に捉える見方は見えなくなっているが、周密の詞はそこからさらに一步踏み出し、水仙が自らの意思を持って梅と山礬の姊妹を思いやると表現した點に、その意義がある。このような水仙から梅や山礬を想う描寫は、周密の詞といずれが先後するかは不明ではあるが、張炎（1248-1320?）の「浪淘沙（余畫墨水仙並題其上）」の前関にも、

回首欲婆娑

回首して婆娑せんと欲す

淡掃修蛾

淡く修蛾を掃う

盈盈不語奈情何

盈盈として語らず 情を奈何せん

應恨梅兄攀弟遠

應に恨むべし 梅兄攀弟の遠く

雲隔山阿

雲の山阿を隔てるを

と詠じ、雲に隔たれた山にいるであろう梅と山攀の姉妹に對し、遠く離れて恨めしく想う水仙の情を描く所に、同様の印象がうかがえる。花を女性に喩えることは、もとより多用される表現であるが、宋詞が持つ、女性の立場や心情を詩よりも強く描き出すという特徴が、水仙花における詩から詞への發展に大きく作用したと考えるべきであろう。

おわりに

黃庭堅が水仙の花を詩に詠じたのは、建中靖國元年、荊州赴任時にのみ集中しており、いずれも人の詩に次韻したり、花を贈られた事に對する情から發したものである。黃庭堅にとつては自發的にゼロから發想した作品ではないものの、その中でも特徴的な二題に、一方には「國香」に表現される悲劇の女性像を、もう一方には「山攀是弟梅是兄」の句に代表される三姊妹像をそれぞれに盛り込んで水仙の花を描いた。それらは奇抜な表現であるがゆえに、「國香」においては高荷がこれに觸發されて「國香詩序」を記し殘

さなければ、悲劇の女性像というイメージは傳わらず、詩人が各自の主観で菊や芍薬を優れた香りと稱したのと同じような一表現にとどまっていたかもしれない。また「山礬是弟梅是兄」の三姉妹像についても、詞において徐々に受容され、周密に至ってようやく悲劇の女性像と三姉妹像、その二つが一つの作品に溶け込み、イメージの共存が果たされることとなる。

本論では、紆餘曲折を経ながらも、黄庭堅の水仙花詩は後世の文人たちに影響を与え、受容される過程について論じたが、これまでも論じた蠟梅や酴醾と同様、黄庭堅の作詩の發想の奇抜さや後世に與える影響の大きさを考えるに、研究範囲はまだ詠花詩にしか及んではないものの、彼の占める位置は相當に重要ではないかと思わざるを得ない。このことが植物以外の他の題材においても言えることであるのか、更には宋代詩詞における黄庭堅の存在がどれほど大きなものであるのか、より大きなテーマを突き付けられたことになったが、それについては今後の課題としたい。

へ 注 へ

(1)拙著「蠟梅詩について」(佛教大學『佛教大學大學院紀要』第三〇號、2002年)、「宋代における酴醾詩について」(宋代詩文研究會『橄欖』第14號、2007年)を参照。

(2)黄庭堅の詩および注の引用はすべて『黄庭堅詩集注』(中華書局、2003年)に據る。また本論では六首のうち三首を引くが、他に「吳君送水仙花并二大本」及び「劉邦直送早梅水仙

花四首」其三・其四において水仙花を詠じている。

- (3) 宋人の生没年は『全宋詩』（北京大學出版社、1991～1998年）に據る。また宋人の詩の引用も、特に注記が無い限りすべて『全宋詩』に據る。

- (4) 鄭永曉『黃庭堅年譜新編』（社會科學文獻出版社、1997年）355頁。

- (5) 高荷の「國香詩」の全文を引く。

「南溪太史還朝晚、息駕江陵頗從歛。綵毫曾詠水仙花、可惜國香天不管。將花託意爲羅敷、十七未有十五餘。宋玉門牆迂貴從、藍橋庭戶怪貧居。十年目色遙成處、公更不來天上去。已嫁鄰姬窈窕姿、空傳墨客慙懃句。聞道離鸞別鶴悲、藁砧無賴鬻蛾眉。桃花結子風吹後、巫峽行雲夢足時。田郎好事知渠久、酬贈明珠同石友。憔悴猶疑洛浦妃、風流固可章臺柳。寶髻犀梳金鳳翹、樽前初識董嬌饒。來遲杜牧應須恨、愁殺蘇州也合銷。却把水仙花說似、猛省西家黃學士。乃能知妾妾當時、悔不書空作黃字。王子初聞話此詳、索詩裁與漫淒涼。只今驅豆無方法、徒使田郎號國香」

なお王銍自身も「次韻國香詩」并序を作り、高荷の「國香詩」に次韻している。『全宋詩』21290頁を参照。

- (6) 『蘇軾詩集』（中華書局、1992年）1746頁。

- (7) 孔凡禮『蘇軾年譜』（中華書局、1998年）951頁。

- (8) 岩城秀夫「梅花と返魂——蘇軾における再起の悲願」（創文社『中國人の美意識 詩・ことば・演劇』所収）

- (9) 増淵法之『日本中國植物名比較對照辭典』（東方書店、1988年）に據る。「山礬」は從來多くの著書が「ジンチョウゲ」と譯しているが、「ジンチョウゲ」は「瑞香」のことであり、

「山礬」と分けて考えるべきであろう。大隅徳保氏も『風と雨の歳時記』（風詠社、2012年）において、「山礬」の特徴から「ハイノキ」であると考えており（173～174頁）、筆者も今はこれに従う。但し「山礬」の和名についてはまだ明確な定説が無く、今後別に考證する必要がある。

(10) 『廣群芳譜』（上海書店、1985年）卷五十二・水仙の項では「游寒巖水仙花二首」と題して載せており、ここでも水仙花を詠じた詩として扱う。

(11) 宋人の詞はすべて『全宋詞』（中華書局、1965年）に據る。